

# 内村鑑三とユダヤ人Ⅱ

## 再臨運動とユダヤ人問題

黒川知文

Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

### 第二章 内村鑑三のユダヤ人観

内村鑑三が講演や著作においてユダヤ人を扱うようになったのは、40歳以降のことであった。明治30年(1897年)1月に、『万朝報』英文欄主筆に就任のために上京し、『後世への最大遺物』を11月に出版した。翌年6月には、『東京独立雑誌』を創刊し、社会に対して宣教する人生段階にはいった。

再臨運動を基準として年代順に、鑑三のユダヤ人観を見ていく。

#### 1 再臨運動以前のユダヤ人観

明治32年(1899年)9月15日から明治33年6月25日にかけて、『東京独立雑誌』43号から71号において、「興国史談」と題する23回にわたる講演録が発表されている。これは、地理、人種、宗教、時、人物の五要素により、古代エジプト王国、バビロニヤ、アッシリヤ、新バビロニヤ(ネブカドネザル王国)、フェニキヤの文明を概観し、第13回と第14回においてユダヤが扱われている。以後は、メデヤ、ペルシャが述べられている。ユダヤは以下のように述べられている。

西方亜細亜が欧、亜、弗三大陸の共有性を備へたる地域なりとすれば、ユダヤは其小邦内に於て三大陸の性質を更に一層明白に且つ純粹に受けて居る国であると言はなければならぬ<sup>1</sup>。

ユダヤ人は国家を持たない民であるが、一国家として扱われていることがわかる。またユダヤ人の性格については、以下のように分析されている。

ユダヤ人は……其物事に熱心なる所謂善に強ければ悪にも強く、そして感情的であつて事を為すに多くは彼等の直覚に依て理屈に訴へなかつた、去りとて彼等の感情は黄色人種のそのやふに浅薄なるものではなかつた。彼等は感ずる時には全身全力を以て感じた……其性質が感情的であつたから亦た単一的であつた……物事に熱心で、其趣好が単一であつた彼等は自づと狹隘の民であつた……狹隘であつたから勿論彼等は執念深くあつた。固執は彼等の特質であつた<sup>2</sup>。

「感情的」「単一的」「狹隘」「固執」がユダヤ人の性格だと、否定的に描写されていると考えられる。

しかし、ユダヤ人の信仰に関しては、神を一つと考え、神をエホバと呼び、正義公道の神であつたとし、「ユダヤ人は世界統一の大希望を懐抱していた」と肯定的に述べられている<sup>3</sup>。

以上をまとめると、生まれながらのユダヤ人は、感情的で狹隘で執念深い、信仰により、世界統一の希望を持っていたということになる。

注目すべきは、「若し立つべきの主義があれば砂漠の上にも大国家を造る事が出来る」と、将来のシオニズムによるイスラエル国の建設を預言していることである。2年前の1897年に第1回シオニスト会議が開催されてはいるが、まだ建国は具体化されていない。鑑三のこの預言は、約50年後の1948年に成就したことになる。

その後鑑三は、明治33年(1900年)9月に『聖書之研究』を発刊し、翌年3月からは毎日曜日に自宅で聖書講義を行った。その後、足尾鉍毒事件解決のための同志会に参加し、講演、伝道旅行も積極的に実施している。

明治43(1910年)2月10日、『聖書之研究』第117号に、マタイ福音書第1章の解釈がされている。そこにおいて、イエスはユダヤ人だと述べた後に、ユダヤ人について以下の説明が述べられている。

誠に真正の意味に於ての世界的民族としてはユダヤ人を除いて他にない……ユダヤ人は最も古い民族である……此最も旧き民族は又其人口の比例に最も多くの偉大人物を産した<sup>5</sup>。

ユダヤ人は、唯一の世界的民族であり、最も古いとして、以下の人物を紹介する。すなわち、モーセ、イザヤ、エレミヤ、パウロ等の聖書中の人物にはじまり、スピノザ、メンデルスゾーン、ラサール、マルクス、ディズレーリ、ドブローヴィッツ、ロチルド家、ブロッホなどである。そして、イエスはユダヤ人であつたために、世界市民主義者であつたと論じている<sup>6</sup>。

この後に以下のユダヤ人論が展開する。

ユダヤ人のみ能く人類の救主を産するに適して居

と思ふ、此一寸の国土を有せざる民、此一台の大砲と一艘の軍艦とを有せざる民、此民が誠に世界平和の唱道者、愛なる神の実現者、即ち人類の救主を産するの特権に与つたのであると思ふ<sup>7</sup>。

ユダヤ人は「世界平和の唱道者、愛なる神の実現者」として、実に、肯定的に描かれている事がわかる。

以上のように、再臨運動以前の鑑三のユダヤ人観は、第一に、否定的な面と肯定的な面とがバランスよく描かれているものであった。第二に、ユダヤ国家の建設が預言されているが、聖書の預言との関係は言及されてはいない事が確認できる。

## 2 再臨運動におけるユダヤ人観

再臨運動が開始される大正7年(1918年)の3月に発行された『聖書之研究』第212号には、「イスラエル全体が神の理想に合ふ伝道師として働く時は来りつつある。選民の存続とキリストの再臨との間に密接なる関係がある」と短く述べられている。ユダヤ人の存続と再臨とが密接に関係するという新たな見解に注目したい。

同年6月発行の『聖書之研究』第215号には、キリストの再臨はユダヤ的思想でありキリスト教思想ではないとする見解に対して、以下のように鑑三は反論している。

多くの尊き真理は猶太人より出たのである。エホバと云い、キリスト(受膏者)と云ひ皆な猶太人的思想である。天地の尽きざる中に律法の一点一画も遂げつくさずして廃ることなしとイエスの言ひ給ひし律法は猶太人の尊崇する律法である。故に若し猶太人的思想なるが故に之を排斥すると云ふならば基督教其物を排斥せざるを得ない。キリストの再臨はキリスト自身の思想であり確信であった。新約聖書は明白にキリストの再臨をイエスの確信又使徒等の信仰として我等に伝える<sup>8</sup>。

イエスの教えはユダヤ教の律法を基礎としている。したがって、再臨はユダヤ教でありキリスト教でないと言うことはできない。再臨思想は、基本的にはキリスト教思想からのものだが、それはユダヤ教を基礎としていると鑑三は論じている。

このように、再臨運動の時期において、ユダヤ人はキリストの再臨と密接に関係するものとして描かれるようになったと言える。

## 3 再臨運動後のユダヤ人観

再臨運動が終息して1年後の大正10年(1921年)2月から大正11年11月にかけて、61歳になり人生の円熟

期にある鑑三は、ローマ書の連続講義を行った。それは『聖書の研究』第247号から第268号にかけて連載された。

ここでは、「外部的にユダヤ人たるも真のユダヤ人ではない、外面的に身に割礼あるも真の割礼ではない、却て内部的にユダヤ人たるものが(それが何処の国人たるにも係らず)真のユダヤ人である」<sup>10</sup>と論じられている。これは、正統的な聖書解釈に他ならない。

ところで、9章から11章にかけてパウロがユダヤ人の救いを望んでいるという内容の後に、日本の救いに関して以下のように論じられている。

我等も日本民族について思ふ。今かれらが自己中心に陥りてキリストを拒否して居るが神は必ず或方法を以て我等の愛する此民を救い給ふであろうと、故にわれらは喜びを以て刈り取る日の必ずいつか存るべきを思ひて今涙を以て種を蒔きつつあるのである<sup>11</sup>。

再臨運動が終わった後も、日本の救いに希望を持つ鑑三の見解がここに見うけられる。

なぜユダヤ人は救われないのであろうか。この問いについて鑑三は、ローマ書から答える。

第一に、聖書の内容に合うためである。「イスラエルの人の多数は救はれざるべしとの事は神の聖意であって、聖書に应ふ事であった」<sup>12</sup>。

第二に、ユダヤ人の不信にあると指摘する。「彼等は信仰に由らず行に由て義を求めた。彼等は己が義を求めて神の義を求めなかった」<sup>13</sup>。

第三に、ユダヤ人の不信によって異邦人がまず救われ、最後に全人類が救われるためだと論じた。「イスラエル人は少数を除いてはキリストにも躓いた。然し是彼等が躓いて斃れんが為でなかつた。之に由て福音が異邦人に臨まんが為であった」<sup>14</sup>。

ユダヤ人が救われない三つの理由は、いずれも聖書の内容に基づいた正統的な解釈によるものである。すなわち、福音が全世界に宣教されて、異邦人が救われ、そしてユダヤ人が救われて、全世界の救いが実現して世の終わりとなる。

さらに、ユダヤ人の救いに関しては、鑑三はまず、過去の歴史から以下のように論じる。

イスラエルの信仰の上にギリシャの知識とローマの常識を接木して、前者は復興して後者は潔められた……茲に所謂欧州文明なる者が起つた、其宗教は猶太教的、其学問は希臘的、其政治は羅馬的であった、是は世界を征服すべき文明であって、ユダヤ人自身も亦其恩恵に浴するに至つた、而してユダヤは何処までも其根であつて、ギリシャとローマとは其枝であつた、ユダヤの産せし基督教

が根となって欧州文明を保つのであって、欧州文明が基督教を保つのではない。異邦はユダヤに向て誇ることは出来ない、文明の元樹はやはりユダヤである<sup>15</sup>。

古代のギリシャ文明もローマ文明もユダヤを基礎としている。キリスト教に基づくヨーロッパ文明も、その基礎はユダヤにあると論じている。

そして歴史の終わりには、異邦人の救いの後に、ユダヤ人の救いがあり、そして全世界の救いに至ると、以下のように鑑三は論じる。

福音はユダヤ人を離れてギリシャ人に臨んだ、然し是れ神が永久に其民を棄て給ふたからでない、是「幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の数盈るに至らん時まで」である、救はるべき異邦人が悉く救われて後に福音は再びイスラエルに帰り来るのである<sup>16</sup>。

このように、第一に、再臨運動後においても、ユダヤ人は再臨と関係して論じられている。第二に、ユダヤ人は終末における全世界の救いと関連で論じられている。すなわち、異邦人の後に救われる民としてユダヤ人が論じられている事がわかる。

#### 4 晩年におけるユダヤ人観

昭和2年(1927年)4月10日、67歳の内村鑑三は、午後の聖書研究会で旧約聖書のエステル記を講義した。講義は5月22日に終わった。同年9月と10月の『聖書之研究』第326、327号にエステル記の研究が連載された。

エステル記においてユダヤ人迫害計画が失敗に終わった事を述べた後、鑑三はヨーロッパにおける反ユダヤ主義的事件を二つあげている。ロシアにおける第二次ポグロムと、フランスにおけるドレフュス事件である。以下はその叙述である。

1903年にユダヤ人の虐殺が行はれて40人が殺され、300人が傷を負った。数は少なかったが第20世紀の欧州に於て行はれし虐殺でありしが故に人道上の大問題となり露西亜帝国に対するユダヤ民族全体の憎悪を喚起し、其事が日露戦争に際し、直接間接に日本の益を為して露国の敗北を招くの因を為したのである。

又殆んど同じ年頃仏国に有名なるヅライフス事件なる者起り、国論沸騰して、是れ亦世界の大問題として取扱はれた。ヅライフスは仏国参謀本部附の一士官であったが、彼がユダヤ人たりし故を以て、中傷迫害至らざるなく、罪なくして遠島に

流され、受難10年、漸くにして彼の妻と友人との努力に由り晴天白日の身と成つたと云ふ事件である<sup>17</sup>。

ポグロムに関しては、実際は、より規模の大きなユダヤ人迫害事件であったが、全容は一応、正確に記されている<sup>18</sup>。1894年に起きたドレフュス事件も、「受難」は5年であり「晴天白日」とは成らなかつたが、全容をとらえている<sup>19</sup>。

これら反ユダヤ的事件を概略して、ユダヤ人論を以下のように展開する。

ユダヤ人は世に嫌はふる民である、然れども如何なる敵意、如何なる陰謀も此民を絶す事は出来ない。古代の帝国は悉く亡びても此民丈けは亡びない……聖書を証明する者はユダヤ人である。聖書はユダヤ人の不滅を証し、ユダヤ人は不滅を実行して聖書を証明するのである<sup>20</sup>。

ユダヤ人は、決して滅亡せず、その存在自体が聖書の預言の証明である、というのが、内村のユダヤ人観である。ユダヤ人と聖書の預言との関係が指摘されている。

昭和3年(1928年)6月2日、洗礼後50周年を記念して鑑三は、新渡戸稲造らとともに、洗礼を受けたM.C、ハリスの墓参りをし、6月12日には、矢内原忠雄、塚本虎二、藤井武、黒崎幸吉らにより『内村鑑三先生信仰50年記念基督教文集』が刊行された。

同年10月14日から11月18日にかけて、午前の聖書研究会で鑑三は、オバデヤ書の講義をした。それが『聖書之研究』の340号と341号に連載されている。

オバデヤの預言通りに歴史が動いた事を述べた後、鑑三はユダヤ史の現状を以下のように述べている。

オバデヤの口より此預言が発せられしより二千七百年後の今日、ヤコブの子孫は残存するのみならず、彼等は一千五百万の大衆と成りて世界の大勢力である。ユダヤ人に一定の国なしと雖も、彼等は世界の市民と成りて、世界至る所に存し、政治、財政、思想、芸術、研究、人生活動の凡ての方面に於て人類を指導しつつある。ヤコブの子孫は南の方エサウの山を獲しに止まらず、南米と豪州と南阿とを得た。東の方ギレアデを獲しに止まらず、亜細亜大陸を其支配の下に置かんとしてゐる。北の方ザレパテを獲しに止まらず、旧き露西亜帝国は今やユダヤ人の配下に属するに至つた。そして西の方海を越えて欧州に伸び、英国米国に渡りて、其哲学化学経済を以て異教の民の間に在りて人類の進歩に大貢献を為しつつある<sup>21</sup>。

全世界にユダヤ人は進出してあらゆる分野において活躍し支配している。これを鑑三は聖書の預言の成就だと見なしていることがわかる。預言に関しては、以下のように論じる。

預言は当らずと云ふは間違である。当り過ぎる程当る。若し聖書が単に神の教を載する書であるならば差程に貴い書ではない。然し乍ら聖書は神の教と共に神の行動を示す。神が如何にして万国を指導し給府乎、明らかに其事を示す<sup>22</sup>。

以上のように、晩年期において、鑑三は、ユダヤ人に対する迫害も、ユダヤ人の繁栄も聖書の預言の成就だとみなしたことがわかる。

## 5 結論

内村鑑三がユダヤ人をどのように見たか、についての分析の結果として、以下のことが結論になる。

第一に、再臨運動以前、ユダヤ人は、「感情的」「単一的」「狭隘」「固執」と否定的な面と、「世界平和の唱道者、愛なる神の実現者」として肯定面も描かれている。またユダヤ人が将来国家を建設すると述べられている。

第二に、再臨運動において、ユダヤ人はキリストの再臨と密接に関係するものとして描かれるようになった。

第三に、ユダヤ人観が大きく転換して頻繁に言及されるのは、再臨運動後であった。ユダヤ人は再臨との関係だけでなく、終末における全世界の救いとの関連でも論じられている。すなわち、異邦人の後に救われる民としてユダヤ人が論じられている。

第四に、晩年においては、ユダヤ人と聖書の預言との関係が指摘されている。ユダヤ人は、決して滅亡せ

ず、その存在自体が聖書の預言の証明であるとされた。さらに、ユダヤ人に対する迫害も、ユダヤ人の繁栄も聖書の預言の成就だとみなされた。

このように、内村鑑三のユダヤ人観は、再臨運動を契機に大きく変貌したことがわかる。

それでは、再臨運動とはいかなるものであったのだろうか。次に、再臨運動を分析して、ユダヤ人問題との関係を考察する。

## 注

- 1 『内村鑑三全集』第7巻（岩波書店、1981年）344頁。
- 2 同、350-351頁。
- 3 同、358-359頁。
- 4 同、357頁。
- 5 『全集』第17巻（1982年）153頁。
- 6 原文では「四海兄弟主義者」とある。同、154頁。
- 7 同、155頁。
- 8 『全集』第24巻（1982年）108頁。
- 9 同、193-194頁。
- 10 『全集』第26巻（1982年）138頁。
- 11 同、338頁。
- 12 『全集』第27巻（1983年）56頁。
- 13 同。
- 14 同、59頁。
- 15 同。
- 16 同。
- 17 『全集』第30巻（1982年）300頁。
- 18 拙著『ユダヤ人迫害史』（教文館1997年）205-207頁参照。
- 19 同、244-246頁。なお、ドレフュス事件に関しては、明治44年（1911年）に、福本日南が以下の記事で報じている。「ドレフヒュ事件—巴里で見た当時の光景—」『新潮』12月号。宮澤正典編『日本におけるユダヤ・イスラエル論議文献目録』（新泉社 1990年）を参照。
- 20 同。
- 21 『全集』第31巻（1983年）335頁。
- 22 同。

（平成18年9月13日受理）